

## 学術雑誌が登場する新聞記事の傾向分析

池松 麻依

今日の日本では、科学技術情報に対する一般市民の関心の高まりが見られる。実際の科学技術情報の入手経路としてテレビと新聞を用いている人が多く、その中でも新聞が発信している情報に対する評価は高い。そこで本研究では、学術雑誌が登場する新聞記事を対象として、新聞はどの学術雑誌をどういった文脈で登場させているのかという記事の傾向から新聞が発信する情報を分析することで、一般市民にとっての科学技術情報の入手経路としての新聞の妥当性を検討する。

調査対象は、2001年・2006年・2011年の朝日新聞と日経新聞の朝夕刊で、本文ないし見出しに「科学誌」という語を含む記事とした。そして対象となった記事を、(1)記事数と記事1件あたりの平均文字数 (2)掲載面ごとの記事の分布 (3)記事中に登場する学術雑誌の名称 (4)学術雑誌の扱われ方による記事の分類、という4つの観点から分析を行った。

記事数と平均文字数の分析から、科学に関する話題を扱う規模は、朝日新聞は縮小、日経新聞は拡大という傾向にあることがわかった。掲載面の分布の分析から、話題にしている学問分野とその掲載面の関係は見られなかったが、朝日新聞では総合面への掲載が多く科学に関する話題は注目度が高いものとしていることがわかった。また、一般紙（朝日新聞）と経済紙（日経新聞）という新聞の性質の違いから掲載面の分布の違いが生じることもわかった。登場する学術雑誌名の分析から、新聞は古くから世界的に評価を得ている学術雑誌を主な情報源としているが、2011年の日経新聞では情報源とする学術雑誌の多様化が見られた。記事中での学術雑誌の扱いの分析から、学術雑誌は詳しい研究成果の参照先の説明や研究の権威付けのために登場していることがわかった。

今回の分析結果より、両紙共にネイチャー誌やサイエンス誌を主な情報源とする姿勢に変化はなく、学術雑誌は情報の参照先や研究の権威付けのために用いられているに過ぎないということがわかった。また、2006年の論文捏造のような事件が発生した場合は、新聞はこれを重大な社会問題として積極的に報道を行い、記事数や掲載面の分布に変化をもたらしたこともわかった。以上の傾向を踏まえると、新しい発見があったという事実やその研究概要を知るためならば、一般市民にとっての科学技術情報の入手経路として新聞は妥当である。しかし、新聞が情報源としている学術雑誌には偏りがあるため、ネイチャー誌やサイエンス誌に載るような学術界でも権威のある発見などに情報が偏る可能性もある。

（指導教員 松林麻実子）